

円地文子「ひもじい月日」

——さくの痣が引き寄せたもの——

高瀬 真理子

日本語コミュニケーション学科
教授

抄録..

円地文子の出世作（第六回女流文学賞受賞）である『ひもじい月日』を作品論の立場から読み解く。さくの女としての一生と人生への向き合い方の変化、夫婦、家族、親子の関係性、その関係性の中にある意識と無意識、戦後復興期における時代の影響を分析する。その中で父親に殺意を向ける息子を守ろうとするさくの究極の愛情についても分析する。

キーワード..臭い、殺意、ガス風呂、零細な小間物屋、自己犠牲的
他者愛、痣、戦後復興、寝たきり、自己浄化、夢による救済

円地文子の出世作と位置づけられる「ひもじい月日」は、昭和二十八年（一九五三）年、『中央公論』十二月号掲載の作品で、文子

四十八歳のときの作品である。

作品発表の経緯について、古屋照子は「一度、『改造』で断られたのを『中央公論』の依頼で掲載された」「なかば持ち込み原稿だったといってもいいかもしれない」と述べているが、小林富久子は、「昭和二七（一九五二）年一月の『中央公論』が『源氏物語集』を企画した際、池田亀鑑の世話で円地も『源氏物語』として改題された原稿を寄せたのだが、それがきっかけ」となっている。^{注2}

「ひもじい月日」が掲載されたと述べている。^{注3}
いずれにしても、平野謙や正宗白鳥の激賞を受け、円地文子が戦後文壇に確固とした地位を築いた記念碑的作品である。翌年三月にはこの作品により第六回女流文学者賞も受賞している。

古屋によれば、この話は円地が「病院で知り合った庶民の女から聞いた身の上話に基づいて書かれたものである」という。^{注4}しかしながら、作者自身から発せられる内奥の声なくして作品は血肉を獲得

し得ない。本稿では、作品論の立場から、さくの人生、生き方の変化、男女・夫婦・家族・親子等の関係性に着眼し、円地の構築した作品世界を分析していく。

一、昭和二十年代の家屋における「中古のガス風呂」設置について

物干場に残してあった家の裏の一坪たらずの空地にさくは風呂場を増築した。風呂場といっても懇意な大工を拝み倒して、世間並みから見ればただのような安値でやって貰ったので、雨の漏らないというだけのみすばらしい板囲いだったが、隣がつかえてどうにも焚き口がつけられないので、風呂桶だけは思いきって中古のガス風呂を買った。

冒頭部は右のような文章で始まる。時間や場所は特定されていないが、さくが「戦争の終わりごろ」「思いきって古着や闇物資のブローカーを始め」たことから続く時期として昭和二十年代半ばの東京を想定しているであろう。

さくが「思いきって」取り付けたというガス風呂について考えてみたい。「家庭用ガス風呂は明治四三年、東京瓦斯から小型及び箱型が発売され、釜は大正五年に錦釜、昭和二年に旭釜さらに長手釜などが考案され」るなどして進化を遂げるが、昭和六年に「東京瓦斯の早沸釜が考案されてから」^{注5}「早沸釜に統一されて戦後に至」る

という。また、家庭用風呂を設けることを前提とした住宅は「昭和三十五年以降のこと」であるという。また、昭和二十年代の内風呂は、「薪や石炭をくべ」^{注6}るものが主流であり、従って、「ひもじい月日」における中古のガス風呂の普請は、確かに「思いきつ」たものであることも、その理由が物理的なことであることも理解できる。中古で無理の利かないさくの家庭では、参考とする浴室の中間に当たる昭和初期の早沸風呂釜を用いた木製の風呂桶であったことであろう。

図1 風呂

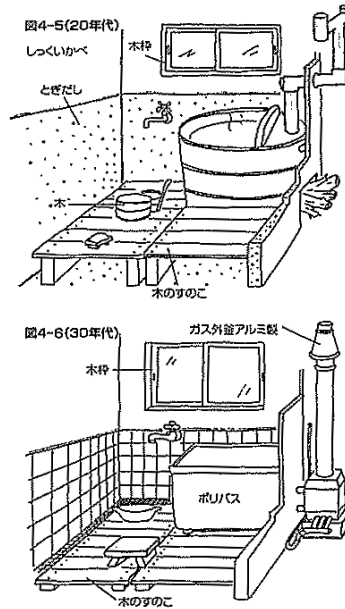


注7 江戸東京博物館にも、これと類似した風呂釜の設置された住居模型がある。

さくが「この風呂場を無理工面することになったのは、勝にせつかれたようなもの」と述べている。この家の働き手は、三人ですべて女性である。妻であるさくと長女の勝と、次女の富江であり、店の経営とミシンによる内職と証券会社勤務で生計を支え、生き抜いている。しかし、戦後復興さなかにある時代の流れは、かなり激しく、さくは乗り切りの難しさを感じていた。この家庭の弱点は、一

二、風呂設置の背後にあるもの

図2

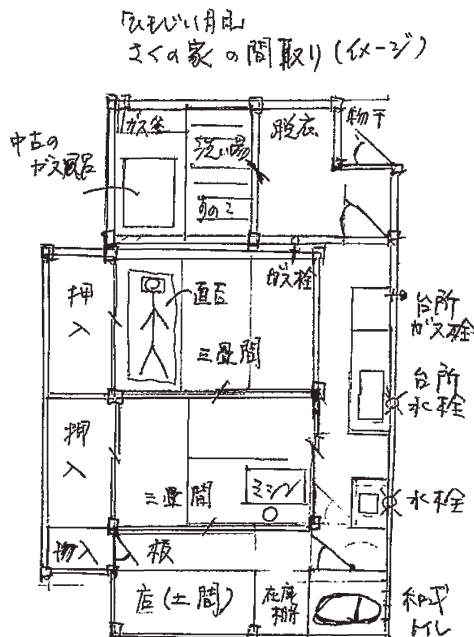


江夏弘

「お風呂考現学 日本人はいかに湯となじんできたか」
1997年5月 TOTO 出版 P134 より転載

図4-5●内風呂(昭和の初めより)―風呂桶は手工業的な木製浴槽。桐または鍔物の風呂釜で、薪や石炭をくべて風呂をわかした。(東京ガス(株)都市生活研究所「わが家のお風呂50年史」より転載)
図4-6●内風呂(ポリバスとガス外装)―昭和30年代の内風呂。ガラス繊維を基材にポリエステル樹脂で形成した浴槽(FRP浴槽)は、丈夫で長持ちし、湯が冷めないといった理由から広く使用されるようになった。当時のポリバスは約2万円(当時の大学初任給は1万6千円)で、そう安価でなかったが、木製が主であった一般家庭に普及した。(前掲書より転載)

図3 家の構造



<筆者作成：作図のポイント>

本来なら、ミシンは部屋の隅に置くべきものであるが、手前の三畳間は勝、富枝、幸二の寝間でもあり、茶の間も兼ねているので、片付けるときは板の間に出すことを想定している。尚、図内のミシンは、縫製するときには広げる上板をたたんだままの寸法で記載している。参考：吉田桂二「間取り百年 生活の知恵に学ぶ」2004年 彰国社

家の主である直吉が脳卒中と思われる病気で倒れ、半身不随で寝たきりになっていることにある。つまり、年中おむつの交換を含んだ介護を必要としていた。

狭い家屋兼店舗の中で、勝から「仕立物に父親の不浄ものの臭

いがつく」と言い出され、「勝の仕事がいくら収入^{みいり}があつたにしても、うちへ一銭でも余分に入れるわけではないが、このごろ店の化粧品や荒物の売上げがげっそり減つて、長くこの商売をつづけられるかどうか見通しもつかないのに、この上勝が分は安くても払いが確実で年中手があくことのない問屋の仕事にはぐれては一そうあがきがつかない」と家族が生き抜くためには、この風呂の設置が必要不可欠であると判断したからであつた。さくがマメに夫の不淨物を取り、根源の夫を清潔に保つ必要性に迫られたものであつた。この家族において、四人もの子どもがありながら、誰も父親の面倒を見ようと考える孝行者には恵まれず、当然、妻であるさくが面倒見るべきものという空気の中、踏み切つたものであつた。また、実は、さくも銭湯で己の身体の秘密を晒さなくて良いという利点があつたが、それを事もなげに指摘したのも勝であつた。

三、さくの人生を阻むもの

さくの「背中の尻によつた方に掌ぐらいの赤痣があるのだ」が、さく自身には見ることでできない場所にありつつも「人生の曲がり角ごとには、必ずその痣が通せんぼうをしていたような気がする」ほど、赤痣に人生を支配されていた。また、見えない痣に支配されるきつかけとなつた出来事も銭湯にいた「裸の子供達」の「びっくりした顔で一斉にさくの方を見た」それぞれの眼「まなざしであつた。さくはそれらの眼に怖じ氣づいて消極的に自分を守り、自分の人

生から逃げ回る結果となつた。さくの人生における「通せんぼう」は、さくが己の人生に怖じけて「逃げまわ」ろうとするところから発生している。当時の女性たちにあつて、人生上の一大イベントは結婚である。専業主婦が圧倒的に多い当時の状況下では、どのような夫を持つかでその女性のその後の人生が決定づけられるほど影響の大きいものであつた。さくは「外を歩いていても、いつも背中の痣が着物の上まで滲み出しているよう」な「気分」に囚われ、「醜い容貌でもないのに自然に老けた顔つきにな」つて「結婚の話が来ると化物にでもおっかけられるように度を失い自分から逃げ」まわり、とうとう婚期を逃す羽目になる。昭和二十年代は、一定の年齢までに結婚できなかった女性は、初婚であつても、相手は再婚話しかなくなるような状況であつた。当然、さくに来る話も再婚話になる。縁談を逃げ回つたさくが、追い詰められて遭遇するのが直吉との縁談であつた。

四、逃げ回つた果ての結婚

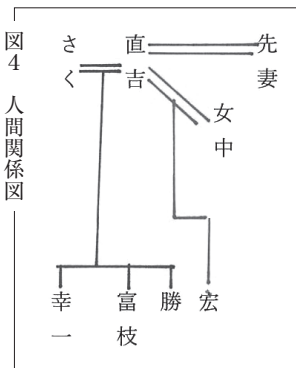
さくは、「素人下宿のお上さん」による仲人の口上手に乗せられて「最初の妻に死なれた後」という直吉と見合いをすることになる。再婚話も離婚と死別では、死別した方が前の配偶者に情が残るとみなされるので、条件的には最悪の部類に入り、さくの母親は「いやな顔」をした。ところが、このお上さんは、「実意のある人」だと話すことで、「恐怖を薄らがらせる」ことに成功する。見合い

の席でさくは「痣のことが気になって相手をよくみるところではなかった」ながら、「瘦形で男にしては色白」の外観と「言葉に訛が多く自慢みたいなことと人の悪口ばかりちゃんぽんにいうのがきざで品がな」という内面を見てとり、「なんとなく気が進まない」いし、「向うから断ってくればよい」と思ったほど、確かに直吉の人物をそれなりに見抜いていた。

最良の相手を見つけない「さくの母親」と「さく自身」に対して、とにかく成婚に持っていききたい「内職」活動である「素人下宿のお上さん」では、基本的にその目的が異なる。おそらく、全く異なったことを伝えたわけではないにせよ、「素人下宿のお上さん」が双方に都合良く話を誇張して伝えたことは、事の真相と共に浮かび上がってくる。従って、どのような誤解に基づいて第一印象の悪い直吉との結婚が成就されたのかは、真実が分かれば分かっただけ、やりきれなさが増す構図となる。お上さんは「直吉にあきらめさせようとして、さくの痣のことも言ってみたが、てんで駄目だった。そんな負い目は自分の妻にする以上一生感じさせないと誓った」という殺し文句が出る。この直吉の言葉が「痣のある娘だけにしっかりと持参金がある」というお上さんの言葉につられて出た欲が絡んでいることを、さくたちは知らない。「痣のことを気にしない」という言葉は、「さくの心身にどんと杓のように強くうちこまれ」親子でそわそわし始める。その結果、さくは直吉と結婚し、結婚生活とはこんなものだろうと思いがら暮らし始めるが、直吉の性格を理解できずに苦勞する。結局、「二十年経った後」にある事件と共に

「見極めをつけ」ることになる。

さくは、この選択の誤りを「汽車に乗ったようなものだ、忘れものに気づいても走っている車から飛び降りることはできない、とさくはよくその時の滑稽なほど矛盾した気持を後で考えて見た」という。しかし、直吉は「しっかり持参金」が「古い貸家一軒」であつたので、騙されたように感じながらもこの点を明らかにせず、さくが「一人前でないようにさげすん」でいる。「金のかからない女だとさえ言えば手を出さずにいられない」性癖を持ち、だからこそさくを選んだ可能性があること、「腑に落ちない行動」の数々が「生まれつきの吝嗇から来」るのだと覚るに至る。二十年の月日を対等な夫婦として建設的な努力もなく、夫の稼ぎに従属するしかないこの時代の典型的な夫婦関係であるばかりでなく、さくが一方的に直吉の吝嗇に由来するモラルハラスメント^{注8}に該当する精神的な蔑みに耐え、「びくびく」しながら生活を切り詰め、年月を経ることになる。もちろん、当時の日本には、モラルハラスメントの概念はな



い。直吉の本性は、宏という「先妻の病気の間に出生りの女中に生ませた子」の存在でも明らかに becoming。さくは、宏の存在についても結婚前に知られることはなく、直吉との間に三人の子どもを産む。しかし、三人目の「幸一がさくの胎にいた時」直吉の本性を知ることになるのである。

五、さくの変化

中学校の英語教師であった直吉が、「同僚の若い女教師に直吉がしつこく言いより、はねつけられたのを根にもってその女教師を目の敵にし」生徒まで巻き込んで問題となり、場末の私立中学へ異動を余儀なくされた。自宅に「風紀上教職に置けぬという脅迫状」まで舞い込むほどの騒動であったと同時に「この事件で幕を切つて落としたように直吉の隠していた面が眼の前にさらけ出されそうになって見れば、いままで何となくうすく感じられていたことはすべてはつきりしすぎるほど鮮やかに証明され」、さくは、今更ながら「自分の迂闊さに驚かされ」る。また、さくは直吉の本性を知るに及んで、なぜ自分と結婚したかの真相にも思い至るようになる。「自分のように身内の痣を恥じている女なら男が言いよつても容易になびくまいと安心して」、さくを妻にしてなお「普段に女の貞潔をうるさく説教していた」のは、直吉こそが「金のかからない女とさえ言えば手を出さずいられない」性癖^{注9}をしていることがつづのである。当時は、セクシャルハラスメントの概念がないと

は言え、人品的には、話せば「自慢みたいなことと人の悪口ばかりちゃんぽんに」言い、「生まれつきの吝嗇」で性的に女性に対してだらしないとくれば、品性下劣で人間的に最低な男性像が浮上する。もちろん、教員としての適性にも欠ける。

さくはいたたまれなくなり、「さくの全身は恥と憎しみで燃え上るのを待」つようになり、さくは背中の痣とは「異種の悪執」を自覚させた。背中の痣から逃げ回る人生を送ってきたさくは、「直吉という男を夫にしている限り、決して癒らない」「持病」を新たに得たことになる。さくは、直吉との離婚をずいぶん真剣に考えたが、「結局三人の子供に足をとられて実行されなかった」という。

それは、女性が三人の子供を引き取って、養育と同時に経済的自立も果たすという難しさにさくも直面したことになるが、さくはさらにその裏面を剥き出す。「愛してもいないのに直吉に身を委せ、次々に子供を生み、夫婦らしい体面をとりつくり生きていく自分」について、「しみじみ不潔な女だ」と感じ、ここでも「背中の痣が直吉と別れたらもう男と暮すことは決して出来ないぞとささやきつづけているよう」にも感じ、直吉が最低でも、そういう男を逃したら最後と思う自分の抱える性を呪いのように重く受け止めている。

宏という「先妻の病気の間に」直吉が「出生りの女中に生ませた」子供のことは、まことしやかに懺悔し、脱毛剤を片手に「同僚の若い女教師に直吉がしつこく言いよ」つたことも、直吉は自分が被害者のように芝居がかった「無辜な犠牲者になりき」るが、さ

くは、「同僚の女教師」への言い寄り事件以降、「最後には」「必ず女教員の脱毛剤」の話を持ち出して、「直吉に言負かされなくなる」。宏の処遇についても「根気よく言争」うようになった。かつての「びくびく」から卒業する。

六、さくと家族の絆について

「宏が応召した時、」さくは鯉を見つけてきて料理している。鯉は「勝男」に通じ、出征時の饗応には縁起物である。さくは、宏を息子のひとりとして、きちんと見送ろうとしていることが分かる。それに対して宏は、当時十六歳だった勝に「おふくろはさぞおれが死ぬばいと思っているだろう。死ぬもんか、ふむ。」と言う。なさぬ仲の息子である宏との仲は難しく、夫婦の諍いの種になりがちだった。このとき勝は、「返事にともっている中に」「むしろ憎くなつて、『遺骨になつて来たら、青森へ持つてやる』と剥き身でもむくようにするりと」言つてのける。勝の精一杯を聞いていた台所のさくが、妙に通ずるものを感じている。まるでさくの「胸にあることが勝の言葉になつて出たのが不気味」だと感じている。この家族は、親子らしい情愛の絡みもなく、それぞれが己のエゴに絡んだ発言や行動を取り、そのことがさくを失望させ、直吉という夫を持った不幸をつくづくと感じ、直吉という夫を持つと「金輪際幸福に憩わせまいと」恨んでいる先妻が「冥土から冷たい風をせつせと吹き送っているような妄想」に捕らわれている。

さくは、「直吉の英語教師が休業同様になった時に、思いきつて古着や闇物資のブローカーを始め、終戦後もその商売の縁で今の場所に露店を出し、鮎や芋を売」り、度々商売替えを行いながら、家族を養うことに専念し、ようやく「今の小間物店に落ちついた」が、家族を守るために、さくはついに経済的自立を果たしている。もはや言い負かされないだけではなく、「直吉が達者な身体でこの家を出て行ってくれることを望むように」変化した。当然その意識は、直吉がさくと言ひ合いになった「翌日は必ず煮豆だの佃煮だの買って帰つて」くる直吉を見て「ミシン台から見降ろし」、「出てゆくのがいやなんだな、まあいいや、食い扶持を入れていうちは……」と言う勝の姿に重なり、富枝もその意識を共有することなどでなんとなく無意識につながっていく。また、「富枝の強情に我を張る執拗さがそっくり直吉に似ている」のに驚き、「絶望」を感じているが、しかし、なんにしても、ここに無自覚な家族が構成されていることは間違いない。また、それは、憎まれ口を叩きながらも、「麻薬の密輸の手先になつて」警察に捕まった宏について、直吉には毒づきながらも、無自覚に「自分の眼にも涙がたまつていた」ことに気がつくさくにも案ずる心はあり、心はバラバラのように見えて、いつしか無意識につながる家族が構成されていることが読み取れる。しかし、それがまだ中学生である幸一にどのような影響を与えているかは、誰も気がついていないのである。

七、幸一の殺意

さくは「中学に通っている末っ子の幸一だけは」直吉にまつわる「因縁がまつわっていない陰のない顔をして」いるのに安堵していた。「直吉にもさくにも似ていない鼻の低い眉の下ったおどけた顔で、ジャズソングを唄って足拍子をとったり、落語の真似をしてひょうきん 剽軽な口をきくのが他愛のないようなものの気を軽くする」のにつられて、「さくは安心して幸一にだけは父親や姉達の愚痴を」聞かせてしまう。幸一は何を言われても「けろりとしているのがさくには幸一の精神の無償な証明のように思われて」、この息子を信頼し、思いを託そうとする。しかし、中学生と言えば、多感な思春期の男子である。

戦争を乗り越え、このまま、直吉が元気なまま去ってくれば、なんとかそれぞれに巣立っていく算段がついてきたところで事態は暗転する。まず、「直吉が夜学の教壇で倒れて運び込まれて来」た。ここに、直吉と別れるという強い願望だった選択肢が潰えることになる。さくの夫として介護せざるを得ないからである。家族からすれば、直吉は全くの邪魔者に堕ちたことになる。直吉は直吉で、頑固に「英語の翻訳をするのだ」と力むが、「さくが養って行く以外のどんな生き方」も考えられない。また、「身体を動かさなくなつた直吉には恩給も年金も」ないという。店の方も復興が進み、普通の「資本の大きい店ほど持ちこたえがきく」状態だが、さくは、「自分の貧しい店を心に浮かべてこの冬が果たしてやって行けるか」

と悩んでいる。家族のそれぞれの自立を促すにしても、どうしても直吉という「病人をつれて立退く先はありようがな」い状況だった。

そういう中でさくは、幸一に声をかけられる。さくは気楽にずけずけ言っているが、幸一の方は言いよどみつ、母親に言い出す機会をうかがっている。ついに、幸一は、『あのガスの栓ね、あれでお父さんをやるつもりないかい』と言い出す。幸一は、「修学旅行のスケジュールでも話すような自然な話し方で、きいているさくの方が地震にあっているように眼がさだまらな」くなる。幸一にとっては、父殺しに当たる。直吉が家族の邪魔者であることは、十分に幸一にまで伝わっていたことになる。『お父さんがいれば不便じゃないか。お母さんだって、姉さんだって、皆おやじが早く死ねばいいといってるじゃないか』と幸一に言われ、「口だけのこと」と言い逃れてみても、『口だけなんか駄目だ……実行しなきゃ……』と言われて「突風に吹きまくられているように」狼狽する。

幸一が、ガス漏れ事故に見せかけた直吉殺害を企てた背景には、二つの要素が考えられる。一つは幸一の身体の動きに染みついているジャズに象徴されるアメリカ文化である。太平洋戦争の結末は、日本の精神性がアメリカの圧倒的な物質の力に蹂躪されるような敗北であった。敗北は、軍国主義否定のみにとどまらず、日本人の強さの源であった精神性の否定と、物の豊かさへの賛美と渴望へ向かう。人をも物化する感性も新時代の混沌の中に入り込み、家庭内の邪魔者を合理的に排除しようとしてこの着想になったと考えられる。もう一点は、冒頭部で中古のガス風呂設置に至った理由の一つ

でもある「直吉の発する臭気」である。間取りを見ても分かることだが、三畳二間に五人も生活していて、直吉が寝たきりで、半身不随であるため、おむつ交換をしなければならぬ。病臭とおむつに籠もる糞尿の臭いは、鼻持ちならないものであろう。加えて、この当時のトイレは和式くみ取り式である。こちら臭気を発しやすい、ミシンで仕上げた内職の品に臭気に移る心配があった事情があり、そのため、銭湯通いが普通のこの時代にガス風呂の普請を優先させたことを考えれば、直吉の臭気に対する殺意にも切実さが滲んでいると考えられる。

八、さくの決断と周囲の変化

家に戻れば、直吉が苦情をくどくど述べる。呆然と悩みながら、さくは、幸一が一人でこの考えに至ったであろうことに思い至っていく。当時、日本の刑法には、尊属殺人罪(200条)^{注10}が存在している。さくは、「直吉を殺してはいけない。殺させてはならない」と「呪文のようにつぶや」き、「直吉の生命を庇うのは、自分より外に誰もいないと思うと、気の遠くなるほど人気がないところに来たような気」になり、「それがどんな愛情の形にもはまらないことを」思い、それでも幸一を守るために「必死の力で、これをやりぬこうと決心」する。

さくは直吉を殺さないために意識して変化する。幸一を守るために直吉の生命を守るという非常に複雑な愛情である。しかし、

「無口になり、余分に働こうとし、冬を越すために「和服の仕立て」のまで引受け」るようになり、「直吉の身の周りの面倒を見るさくの立居ふるまいは遙かに細やかになり熱心になつ」ていった。勝が「お母さんまで頭へ来たんじゃないか」とか「莫迦に亭主孝行だね」と白い眼でみても「さくから「いじけた笑いなど」が消えて「さつさと通り抜けて行」くようになる。常にガスの栓を気にしながらまめやかに動いていくさくの姿を子どもたちが驚きつつ見守る中で、直吉も無意識の変化を遂げる。

「直吉はさくが変ったのに少しも気がつかぬながら無意識に気がゆるみ、さくに甘え出」す。「子供の駄々をこねるようにさくを呼び立て」る様を子どもたちは鼻白みながら見ている。甘えるということは、相手に気を許し、相手にもたれかかり、わがままを言うことである。この夫婦の間に愛情はないのだと思われるのに、無意識な夫婦らしさがにじみ出るようになったこともまた否めない。

そういうある日、さくは夢を見て「異様な呼びごえをあげ」る。直吉がさくを「呼びさま」すという夫婦らしい行動も見られる。さくは「何とも言えない綺麗」な夢を見ていて呼び覚まされ「惜しかった」と言っている。それは「墨絵の鳥のような」地味な鳥が「水にくぐるかと思うと、嘴を空に向け、羽ばたいては又、水に潜る、同じ動作をいく度もいく度も繰返すのが見え」、さくの気にかかる。そうこうするうちに「水が噴水のように噴き上げて来た。見る間に噴き上げる力が強くなり高くなり、明るくなる中に、水の色が虹のように輝き出し」、その中に「孔雀とも鳳凰とも見極めよう

のない絢爛と輝く巨大な翼をいっぱいひろげていくたびか羽ぶる
 いした」のを見、その輝くような鳥は、さつきの黒い地味な鳥が変
 化した姿だと信じて眺めている。

さくはこの夢を最後に直吉を風呂に入れて、洗い物をしている最
 中に突然死する。家族をすべて置き去りにし、現実生活の軌からた
 だ逃れただけのような人生を終えている。この夢の話は、救済のな
 いさくの人生の唯一の救済だと考えることができる。つまり、鳥の
 姿はさくの人生の暗喩であり、同じことの繰り返しをしているうち
 に光を放って、成仏を約束するかのような仏の光のように読み取る
 ことが可能だからである。

九、さくの死

さくの人生は、はじめは己のあざに怯えて逃げるだけで自分の人
 生から逃げていた。そうして、当然人品も卑しい再婚者の直吉とうっ
 かり結ばれる羽目になったが、さくは、人生から逃げるのを止め、
 子供を守り、愛情を感じられない直吉の生命を守ろうとして、己
 を磨くために献身的に直吉の汚物を洗っている。日常生活で必要な
 行為であるとは言え、その行動は自己浄化と見なすことも可能であ
 る。それは、あたかも光明皇后が癪病の膿をすすったと言われる
 話にも似て、さくが家族とは言え、他者の生命を守るところまで、
 自己犠牲と他者愛に目覚めた姿は、日常では救済のない平凡な女の
 生涯であると言え、夢で救済を予見され、おそらく成仏したのであ

ろうことをほのめかされる結末となる。平野謙が「このような境涯
 にある女性に死によつてしかその自由も保証されないことが私にも
 よく納得できた」と述べるのもこの夢から死への展開へである。^{注11}

さらに、谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」^{注12}冒頭部は、章三郎が白鳥
 の夢を見ている場面から始まる。章三郎の夢は「暗黒な背景の奥へ
 鳥の形がだんだん薄く吸い込まれて」、「五彩の虹を湛えた麗しい泡
 が無数にちらちらと湧き上がって来たが、その中で一番大きな泡の
 面に奇怪極まる裸形の美姫」が「映り出して」くる。谷崎の場合
 は、耽美の世界を夢から生み出して悦に入っている間に目覚めて
 「取り留めのない悲しみ」を覚える様が描かれている。円地「ひも
 じい月日」におけるさくの夢を同様に考えると、さくの救いのない
 人生へのささやかな安らぎだと言いうことができよう。

作品の読後、残された家族がここからどうなったのか気になる
 ところではあるが、坂口安吾の「文学のふるさと」^{注13}にあるがごとく
 「アモラルなモラル」つまり、「モラルがない、とか、突き放す、と
 いうこと、それは文学として成り立たないように思われるけれど
 も、我々の生きる道にはどうしてもそのようでなければならぬ崖が
 あって、そこでは、モラルがない、ということ自体が、モラルなの
 だ、と。」と同様な作りだと思われる。それによつて安吾の言う
 「絶対の孤独」も浮かび上がり、救いのないことが救いだとは知らさ
 れる。「文学のふるさと」の初出は昭和十六年であり、円地は無名
 の女の一生をこのような形で鮮烈に印象づける手法として採用した
 とも考えられる。

注

本文の引用は、『円地文子全集』新潮社 昭和五十三（一九七八）年を底本としている

注1 古屋照子『円地文子——妖の文学』沖積舎、平成八（一九九六）年八月 P 93

注2 小林富久子『女性作家評伝シリーズ11 円地文子 ジェンターで読む作家の生と作品』新典社、平成十七（二〇〇五）年一月 P 156 「源氏物語の作者」として改題された原稿」の元タイトルは「紫式部」である。

注3 平野謙の作品評『日本読書新聞』昭和二十八（一九五三）年十一月三十日、正宗白鳥の書評『読売新聞』昭和三十（一九五五）年一月二十二日の記事による

注4 古屋照子、前掲書 P 94

注5 江夏弘『お風呂考現学』TOTTO出版 一九九七年五月 P 129-130

注6 江夏弘、前掲書 P 134

注7 東京ガス「GAS MUSEUM」http://gasmuseum.jp/life_warmth 最終閲覧日二〇二二年十一月三日

注8 モラルハラスメントは、フランスの精神科医、マリール・フランス・イルゴイエンス「モラル・ハラスメント——人を傷つけずにはいられない」（一九九八年 邦訳…紀伊国屋書店）で提唱した概念であるので、それ以前においては、この概念は認識されない。

注9 セクシャルハラスメントは、一九七〇年代にアメリカで作り出された造語と言われる。一九八〇年代にセクハラに関わる事件や民事裁判が起ころので、この概念も認識されない。ちなみに、刑法における強制わいせつの概念は存在する。

注10

一九〇八年制定の明治刑法により、自己または配偶者の直系尊属を殺した者について、通常の殺人罪（刑法第199条）とは別に尊属殺人罪（刑法第200条）を設けていた。通常の殺人罪では三年以上～無期の懲役、または死刑とされているのに対し、尊属殺人罪は無期懲役または死刑のみと、刑罰の下限が高く、より重いものになっていた。一九七三年（昭和48年）四月四日に、最高裁判所で石田和外（大法廷裁判長）により、こうした過度の加重規定は、日本国憲法下では違憲であると違憲判決の確定判決が下され、それ以降は適用されなくなり、一九九五年（平成7年）の改正刑法で正式に削除された。従って、この作品執筆時には、未だ適応されている。

注11 前掲書、平野謙『日本読書新聞』昭和二十八年十一月三十日

注12 谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」『中央公論』大正六（一九一七）年七月

注13 坂口安吾「文学のふるさと」『現代文学』第4巻6号 昭和十六（一九四一）年七月

Fumiko Enchi 「A woman's life with suffering from lack of love」
—— for her birthmark ——

TAKASE Mariko

Abstract :

Fumiko Enchi's career success story, "Himajii Tsukihi," (winner of the Women's Literature Award) can be read from the standpoint of work theory. Enchi analyzes Saku's lives and the changes in how they approach life, relationships between husbands and wives, families, and their children, conscious and unconscious factors in those relationships, and the influence of the times in the post-war reconstruction period. In it, we also analyze Saku's ultimate affection for him, as she tries to protect her son, who has murderous intentions toward his father.

Keywords : Odor, Murderous intent, Bath tub gas water heater, Small notions store, Self-sacrifice, Birthmark, Post war rebuilding, Bedridden her old man, Auto catharsis, A dream of rise to heaven